



Title	句接辞における用法の拡大
Author(s)	平野, 啓太
Citation	間谷論集. 2023, 17, p. 23-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91363
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

句接辞における用法の拡大

平野 啓太

〈キーワード〉 類推 スキーマ 接尾辞 句接辞 構文

1. はじめに

本稿で取り上げるのは接尾辞の中でも「もともと句ないし節を対象とする」(影山 1993 : 329) 句接辞のグループである。

(1) (「名詞的なもの」)

- | | |
|--------------------------------------|---------------------------------|
| a. [いまにも雨が <u>降り</u>] <u>そう</u> (だ) | f. [お金を <u>借り</u>] <u>っぱなし</u> |
| b. [なにか <u>言</u> いた] <u>げ</u> (だ) | g. [仕事に <u>追</u> われ] <u>ぎみ</u> |
| c. [仕事に <u>か</u> かり] <u>っきりだ</u> | h. [授業を <u>休</u> み] <u>がち</u> |
| d. [爛を <u>し</u>] <u>たて</u> の酒 | i. [ビールを <u>飲</u> み] <u>放題</u> |
| e. [マンションを <u>契</u> 約] <u>済</u> みの人 | |

(影山 1993 : 329–330 下線は原文のまま)

本稿では (1) のような句接辞のうち、動詞連用形に接続するものを取り上げる。

これまでの句接辞に関する先行研究では、生産的なものに注目されることが多かった。しかし、後述するように、それとは別に句接辞の中には生産性の低いものも存在する。これらを分析対象に加えることで、句接辞について、今まで注目されてこなかった用法の拡大という側面に焦点を当てる。

本稿は、現代語でのいくつかの句接辞（とそれに類するもの）の使用実態を記

述し、その観察から、類推的であれ、スキーマ的であれ、モデル¹が他の接尾辞から提供されることで用法が拡大し、句接辞全体のネットワークが広がっていくことを示す。

2. 生産性の低い句接辞

句接辞（あるいはそれに相当するもの）については、個別的な研究は多くある。しかし、影山（1993）のように句接辞全体に言及する研究はあったものの、新山（2020）の指摘の通り、総合的に扱われること自体は少なかったと思われる。

今まで扱われてきた句接辞は、影山（1993）、新山（2020）、平野（2021, 2022）内での「たて」「かけ」「ばなし」「きり」「どおし」「放題」「まくり」「すぎ」「がち」「気味」「め」「そう」「げ」などである²。これらは「きり」「め」「げ」を除けば、高い生産性を持っているものばかりであると言える。

それに比べ、一見生産性が低く、先行研究で取り上げられてこなかった句接辞には次の「づめ」「ずくめ」「加減」などもある。これらは前接する動詞連用形がかなり固定的のように思われ、句を包摂する用例はインターネット上でも少ない。以下に同じ傾向を持つ「め」を加えた用例を挙げる。

- (2) 朝から文章を読み**づめ**だと頭や目がぼやっとなってしまうことも再三ではありません

< <https://biwako-arts.or.jp/rd/kokoku-essay/8750.html> >

（最終検索日 2022 年 10 月 25 日）

- (3) 子供たちは、普段から鍛えているのか開園から閉園まで TDL を走り**ずくめ**でも全然びくともしない程の体力の持ち主です

< https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1246621092 >

（最終検索日 2022 年 10 月 25 日）

- (4) 最近の芋焼酎は香りを抑え**め**ですがこの「つわぶき紋次郎」は、いも焼酎独特の香りをしっかりと持っています。

< <https://item.rakuten.co.jp/e-angel/10004617/> >

(最終検索日 2022 年 10 月 25 日)

(5) 藤田菜七子騎手も若干、手綱を抑え**加減**です< <https://ameblo.jp/meshispo-keiba/entry-12241701522.html> >

(最終検索日 2022 年 10 月 25 日)

本稿で扱う句接辞は、生産性が高い「どおし」「気味」、生産性が低い「づめ」「ずくめ」「め」「加減」である。各句接辞の個別的な意味は平野（2021, 2022）で記述されているが、これに基づき、本稿で扱う句接辞の意味をまとめると以下の表 1 のようになる。

表 1 生産性と意味の分布

	生産性が高い接尾辞	生産性が低い接尾辞	
「継続」 ³	どおし (働きどおし)	づめ (働きづめ)	ずくめ (働きずくめ)
「状態傾向」	気味 (疲れ気味)	め (控えめ)	加減 (俯き加減)

また、本稿では句接辞かどうかを統語的要素が前接する用例があること（「を格」の包摂やサ変動詞の接続など）で判断しているが、統語的要素が前接する用例は見当たらないものの、「どおし」「づめ」「ずくめ」と同様に「継続」を表す接尾辞として「づくし (e.g. 働きづくし)」「づけ (e.g. 働きづけ)」などが存在する。これらについても句接辞となる可能性がある接尾辞として分析対象に含める⁴。

3. 各接尾辞の使用実態

3 節では表 1 でまとめられた意味を持つ接尾辞の使用実態について記述する。

3-1. 「どおし」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」

「継続」を表す接尾辞「どおし」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」のうち、最も生産的なのは「どおし」である。以下に「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」（検索ツール「中納言」）での用例を見る。「どおし」は、「接尾辞」

として分類されていないため、条件として「キー：[語彙素＝通す]＋前方共起：[活用形＝連用形]」で検索し、576件を得た。その後、誤解析や複合動詞と思われる使用例などを除き、79件を抽出し、2件以上検出された前接動詞を提示すると表2のようになる。

表2 「どおし」の前接動詞

順	前接動詞	例数	順	前接動詞	例数
1	する	17	4	苦勞を掛ける	3
2	歩く	5	4	泣く	3
2	働く	5	5	思う	2
3	立つ	4	5	悩まされる	2
3	迷惑を掛ける ⁵	4	5	駆ける	2
4	生きる ⁶	3			

また、「する」についての内訳は、「苛々する」(4件)、「緊張する」(3件)、「心配する」(2件)、「オロオロする」(1件)、「苦勞する」(1件)、「ハラハラする」(1件)、「感心する」(1件)、「ビクビクする」(1件)、「後退する」(1件)、「ムカムカする」(1件)、「後悔する」(1件)である。

ここで「どおし」で3件以上検出された前接動詞が、他の接尾辞ではどの程度現れるかを調べる。生産性の低い接尾辞の用例を集めるため、BCCWJに代えてウェブコーパス「Japanese Web 2011 corpus (jaTenTen11)」(検索ツール Sketch Engine)を用いた。検索は「[lemma＝働く]＋[lemma＝詰め/尽くめ/尽くし/潰け]」という条件で行った。誤解析や不適当な用例を除いた検索結果が次の表3である⁷。

表3 前接動詞の比較（「どおし」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」）

	どおし	づめ	ずくめ	づくし	づけ
働く	208	1658	190	7	3
歩く	275	201	38	0	0
立つ	132	68	42	5	0
迷惑を掛ける	99	0	0	0	0
苛々する	108	0	0	0	0
緊張する	45	0	0	0	0
苦労を掛ける	13	0	0	0	0
泣く	334	2	1	2	0

*列は BCCWJ 内での「どおし」の前接動詞の降順

また、「どおし」以外の各接尾辞において、他にどのような動詞連用形が前接要素として現れるかについても、「[tag=V.g & infl_form=Cont.g] + [lemma= 詰め / 尽くめ / 尽くし / 漬け]」という条件で検索した。「づめ」と「ずくめ」においては比較的広い範囲の前接要素が見られる（特に「づめ」については5-3節でも触れる）。その一方で「づくし」「づけ」の前接要素は限られている。「づくし」は「歌う」（2件）、「語る」（2件）、「悟る」（1件）、「話す」（1件）、「歩む」（1件）、「出かける」（1件）、「づけ」は「飛び込む」（1件）、「飲む」（1件）、「舐める」（1件）、「食べる」（1件）、「痛む」（1件）が見られた。そして、全体として5件以上検出されたものは「づめ」における「動く」（15件）、「通う」（9件）、「歌う」（6件）、「ずくめ」における「食べる」（5件）といった程度であった⁸。

以上のことから、「働く」「歩く」「立つ」という一部のの前接要素に各接尾辞の用例が集まっているとわかる⁹。

3-2. 「気味」「め」「加減」

続いて「状態傾向」の意味を持つ「気味」「め」「加減」の関係を見る。「気味」「め」「加減」の中で、とりわけ生産性が高いのは「気味」である。その頻出の前接動詞について、趙（2016）が BCCWJ を用いて調べた結果（表4）を次に示す。

表4 「気味」の前接動詞

順	前接動詞	例数	順	前接動詞	例数	順	前接動詞	例数
1	疲れる	41	8	諦める	10	12	被る	5
2	太る	33	8	切れる	10	12	落ちる	5
2	遅れる	33	9	酔う	9	13	曇る	4
3	押さえる	26	10	掠れる	8	13	凹む	4
4	開く	16	10	荒れる	8	13	伸ばす	4
5	ばてる	14	10	上がる	8	13	逃げる	4
5	持て余す	14	10	焦る	8	13	引き締める	4
6	下がる	13	11	引く	7	13	びびる	4
6	慌てる	13	11	狼狽える	7	13	痩せる	4
7	サボる	12	11	押す	7	13	減る	4
8	乾かす	10	12	垂れる	5	13	落ち込む	4

(趙 2016 : 42 を一部改変¹⁰⁾)

一方で、「め」「加減」も BCCWJ で検索するには使用例が少ないため、Japanese Web 2011 corpus (jaTenTen11) を用い、「気味」における頻出の前接動詞が「め」「加減」においてどのように現れるのかを調べた。

(6) a. と言うか、かすれ目で画面がよく見えないや。

b. この方の太り加減がとても好き。

(Japanese Web 2011 corpus (jaTenTen11))

検索にあたっては、(6a) のような実質名詞としての「目」の使用や、(6b) のような「程度」を意味する「加減」の使用は、「状態傾向」を表す接尾辞の例ではないため除外し、表 5 のような結果を得た。

表 5 前接動詞の比較（「気味」「め」「加減」）

	気味	め	加減		気味	め	加減
疲れる	5143	12	1	焦る	2032	1	0
太る	2679	24	1	引く	4288	63	9
遅れる	4622	60	14	狼狽える	63	0	0
押さえる	4287	6801	11	押す	1605	4	2
開く	1088	28	75	垂れる	1169	13	3
バテる	2153	0	0	被る	414	0	0
持て余す	1258	0	0	落ちる	1478	58	9
下がる	3170	709	5	曇る	553	1	18
慌てる	222	3	0	凹む	1278	0	18
サボる	2975	1	3	伸ばす	231	5	6
乾かす	167	7	0	逃げる	106	0	1
諦める	1602	0	32	引き締める	52	1	2
切れる	864	0	14	びびる	589	5	4
酔う	584	4	12	痩せる	1320	15	1
掠れる	659	7	1	減る	230	1	5
荒れる	1568	9	6	落ち込む	1142	0	16
上がる	1193	666	9				

* 列は BCCWJ 内での「気味」の前接動詞の降順

ただし、表 5 では 0 件の用例も全く存在しないわけではなく、インターネット上では、以下の「バテめ/加減」ように、用例がわずかに見つかるものもある。

- (7) a. 広々とした会場ではあるものの、ものすごい熱気でいつもより汗多め少しバテめでしたがフルパワーで挑みました

<https://note.com/shoma_kumamoto/n/n186ab0bb45b1>

（最終検索日 2022 年 10 月 25 日）

- b. 11:00 前 社が森

この付近より、H 氏、ややバテ加減だ。

<<https://www.yamareco.com/modules/yamareco/detail-238742.html>>

(最終検索日 2022 年 10 月 25 日)

「め」「加減」における高頻度の用例は、表5内における「押さえめ」、そして「控えめ」「俯き加減」である。Japanese Web 2011 corpus (jaTenTen11) において、「押さえめ」は6801件(「押さえる+目」で150件、「押さえ+目」で65件、「押さえめ」で6586件)、「控えめ」は97112件(「控える+目」で1008件、「控え+目」で87件、「控えめ」で96017件)、「俯き加減」は4299件(「俯く+加減」で3976件、「俯き+加減」で323件)検出される。いずれも表5における「め」「加減」の他の用例に比して圧倒的に多い。このことから、「押さえめ」「控えめ」「俯き加減」は語彙に近いレベルで定着していると考えられる。

また、「め」「加減」において表5で示された以外の前接要素がどのように現れるかについて、「[tag=V.g & infl_form=Cont.g] + [lemma=め/加減]」という条件で検索した。各前接要素には(6ab)のようなものも多数混在している。本稿で対象とする「状態傾向」を表す用例については、表5に示されているものを除けば、10件以上現れるものは、「め」においては「急ぐ」(242件)、「下げる」(92件)、「落ち着く」(58件)、「冷やす」(42件)、「乾く」(15件)、「巻く」(13件)、「離す」(12件)など、「加減」においては「傾く」(44件)、「振り向く」(27件)、「引っ張る」(15件)、「閉じる」(13件)、「浮く」(11件)が検出される。「振り向き加減」(27件)が「振り向き気味」(9件)より多いことを除けば、これらはいずれも「気味」と共に用いられた場合の用例より少なく、「押さえめ」「控えめ」「俯き加減」ほど突出して多い用例は見当たらなかった。

ここまでの使用実態の観測から、一部の語彙的な定着を除けば、「め」「加減」は、各前接動詞の頻度の差自体に留意する必要はあるものの、「気味」と共通する前接動詞が大体の項目で広く使えること、その一方でその頻度が「気味」に比してかなり低いということがわかる。

3-3. まとめ

3-1節では「どおし」において頻度の高い前接動詞(「働く」「歩く」「立つ」)

が他の接尾辞にも現れていること、3-2節では「め」「加減」は、「控えめ」「俯き加減」のように語彙的な定着度が高い用例がある一方、低い頻度である場合が多いものの、「気味」と同様の前接動詞が広く用いられていることがわかった。

4. 理論的概観と本研究の立場

3節で示した使用実態をどのような過程で説明できるだろうか。4節では理論的概観と本稿の立場について述べる。

4-1. 類推とスキーマ

新たな表現パターンを生み出す方法として、類推 (analogy) に基づくか、スキーマ (schema) に基づくかという議論が長くなされてきた。

類推は、Bybee (2015 : 112) を参考にすると「既存の形式やパターンに基づいてある形式を作り直すこと」(小川・柴崎訳 2019 : 146) と定義できる。類推では、次の (8) のように事例を並べた四項比例式で表されることが多い。

(8) seem : seemed :: dream : dreamed

(Bybee 2015 : 94 下線は原文のまま)

一方、認知言語学では、新表現を形成する場として抽象的なスキーマを重視する立場もある。

類推とスキーマ、どちらに基づくかについての研究において、例えば、Kay (2013) は all-cleft 構文が生産的でルール (本稿でのスキーマ) に従うのに対し、A as NP [very “A”] のパターンは、下の (9) のように多くの表現がこれに当てはまるが、これを基に自由に新たな表現を生産することはできないとし、この場合、類推 (に基づく coinage) によって可能なパターンが作られると考えている。

(9) dumb as an ox / green as grass / dead as a doornail / happy as a lark
/ strong as an ox / flat as an pancake

(Kay 2013 : 37 より抜粋)

しかし、類推とスキーマが二者択一という考えには批判もあり、例えば Langacker (2000) は次のような主張をし、純粋に類推のみだと思われるアプローチにも何らかのスキーマ（共通性）の抽出が必要になるとしている。

純粋に類推だけにに基づき、いかなる抽象化もスキーマの抽出も想定しないようなアプローチは、言語に見られるパターンは一般性の低いものから高度に一般的なものまであらゆるレベルの一般性を持つという使用依拠的な考え方にはつきり反するものである。それだけでなく、そうした考え方はそもそも矛盾していて、(類推の基盤として必要になる) 個々の具体的な表現の習得さえも実際の使用事象からの抽象化やスキーマの抽出を必要とすることを見落としている。

(Langacker 2000 : 59 ; 坪井訳 2000 : 139)

Tuggy (2007) は -jet の発達を類例とし、それが inkjet から始まり、次に inkjet を類推の基盤として、特有のプリンターのブランド名のため deskjet や laserjet などの語が作られ、そこから拡張して N-jet、さらには V-jet や Adjective-jet のように広くスキーマに基づき新表現が生まれるようになっていったとしている¹¹。Tuggy はこのようにスキーマが抽出されるまで、類推が喚起されると言いつつ、認知文法 (cognitive grammar) では両者の違いは程度問題であることを述べ、両者が同時に活性的になることを指摘している。

同様に、構文を形態論に応用した構文形態論 (constructional morphology) を唱える Booij (2010) は、「何かについての政治的スキャンダル」を表す -gate について、話者は元来のモデルである Watergate を直接参考にする場合（つまり、類推の場合）も、(10) のようなスキーマを合成に利用する場合もあり、区別がつかないと述べている。

(10) [[x]Ni [gate]N]Nj ↔ [political scandal pertaining to SEMi]j

(Booij 2010 : 94)

本稿でも構文¹²という観点を取り入れ、Tuggy (2007) や Booij (2010) と同様に、具体的な事例に基づく類推と、抽象的なスキーマの二者択一ではなく程度問題であり、ある時は、より具体的なレベル（類推）、ある時は、より抽象的なレベル（スキーマ）に基づくことで、新たな表現パターンを生み出していくと考える¹³。

4-2. 異なる接尾辞間のつながり

類推的变化は、上の Langacker (2000) の指摘のように、「何らかの共通性に基づいて」なされると考えられるが、どのように類推が働くかは先行研究で必ずしも特定されているわけではなかった。しかし、本稿で3節に示した各接尾辞における前接動詞の分布は、類似した意味を持つ接尾辞同士が共通の前接動詞を接続させることを示している。これを説明するためには、類推（事例）レベルであれ、スキーマレベルであれ、生産的な接尾辞をモデルにすることで、ある接尾辞がその用法を拡大させると想定することが合理的であると考ええる。

では、実際に拡大においてはどのような要因が存在するのだろうか。本稿では、次の図1で示されるような、意味と形式¹⁴の類似・共通性に基づく異なる接尾辞間の結びつきが重要だと考える。

図1 異なる接尾辞間の結びつき



図1では、「どおし」と「づめ」は、下位レベル（具体的レベル）では形式が異なり、それぞれが表す「継続」の意味もそれぞれ微妙に異なっている（ α/β で表現）が、上位レベル（抽象的レベル）においては、同じ形式と意味であることが見出され、両者が結びつく。それにより「どおし」が「づめ」の使用の広がり

に關与していくと考える。

4-1 節における Tuggy (2007) や Booij (2010) の研究は、-jet や -gate などの合成表現の前部に新たな形態素が入ることで新たな表現が形成されていくという過程を想定している。本稿ではこのような過程を、上記のようにより広く想定することで、「どおし」「づめ」などの異なる接尾辞で同じような前接動詞が現れることを説明できると主張する。これにより、個々の合成表現の使用の拡大だけでなく、それを包括する句接辞というカテゴリー全体の広がりの説明が可能になると考えられる。

5. 用法拡大の過程

5 節では用法拡大のメカニズムについて考察する。5-1 節は「どおし」に基づく類推的な使用の広がり、5-2 節は「気味」に基づくスキーマレベルの使用の広がりについて考察する。5-3 節では、5-1 節と 5-2 節での考察を基本としつつ、どちらのケースにおいても類推とスキーマの両方が用法の拡大に関わる可能性について述べる。

5-1. 「どおし」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」と用法の広がり

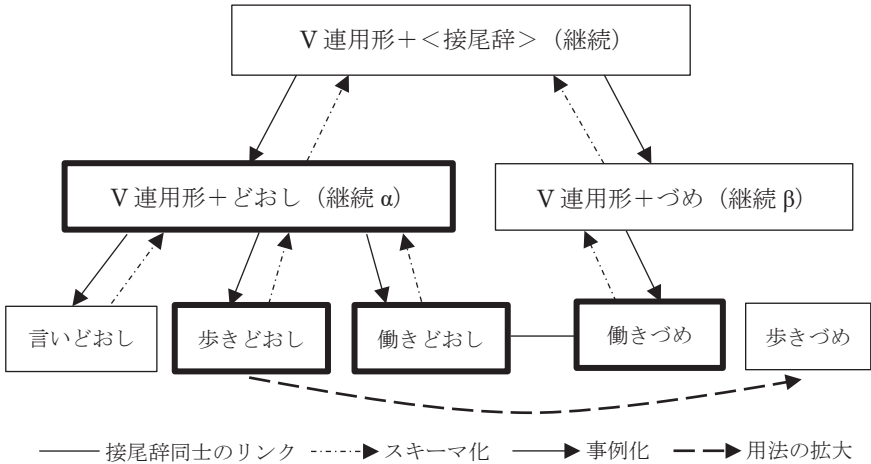
3-1 節で見てきたように「働く」「歩く」「立つ」など「どおし」における一部の高頻度の前接動詞が他の接尾辞にも現れている。

どのようにこのような用法が現れるようになるのだろうか。「づめ」の場合を例にすると、「どおし」と「づめ」においては、ともに「働く」という前接要素が多く、これを起点として事例レベルで「どおし」「づめ」の比較がなされたと想定できる。以下にその比例式を示す。

$$(11) \text{働きどおし : 働きづめ} = \text{歩きどおし : [X]づめ} \quad [X = \text{歩き}]$$

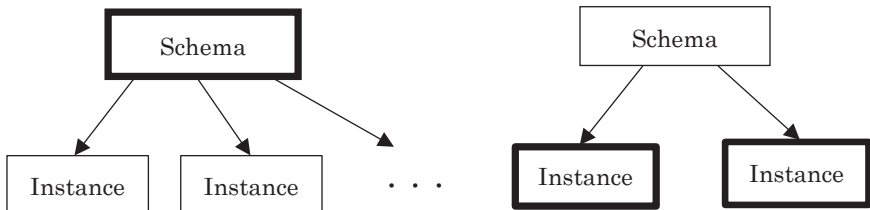
(11) の比例式は図 2 のように「V 連用形 + <接尾辞> (継続)」が「働きどおし」「働きづめ」の背景にあり、それを基盤として両接尾辞が比較されることで成り立つ。

図2 「づめ」の使用拡大



Barðdal & Gildea (2015) は、次の図3のようにタイプ頻度とトークン頻度のうち、定着度が高いものを太枠で示している。タイプ頻度が高い図3(a)では、スキーマが話者の脳内に定着しており、トークン頻度が高い図3(b)では、個々の事例が定着し、事例から抽出されるスキーマが脳内で意識されることはないとしている。

図3 異なるレベルの定着



(a) High type frequency

(b) High token frequency

(Barðdal & Gildea 2015 : 33)

図2はこれに従い、それが事例レベルであれ、スキーマレベルであれ、話者の脳内で強く定着しているレベルを太枠で示している。また、「どおし」のようにスキーマレベルで定着していても「働きどおし」のように、事例レベルで特に頻度が高いものがある場合、そのレベルでの定着度も高いと考え、同様に太枠で示している。

両接尾辞における共通の背景としての抽象的なスキーマ「V連用形+<接尾辞>(継続)」や、「V連用形+づめ」というスキーマの定着度は低い。そのため、事例レベルで定着している「働きづめ」と、「働きどおし」が繋がる。直接比較される、このような繋がり的事実を便宜上「リンク」と呼んでおく。これに基づき、「歩きどおし」から「歩きづめ」が現れることになる。一方、頻度の低い「言いどおし」からは「言いづめ」は出現しない。他の接尾辞においても同じ過程が想定できる。

しかし、「ずくめ」の場合は、動詞連用形ではなく、名詞接続使用が中心である。「ごちそうずくめ」「いいことずくめ」などの用例があり、「モノやコトの多さ」を表す。そこから、(12)のように動詞連用形に接続し、「継続」の意味を表すようになったと思われる。では、このような過程でどうして「働かずくめ」が多くなるのだろうか。

- (12) ごちそうずくめ, いいことずくめ → 働かずくめ, 立ちずくめ
 (モノの多さ) (コトの多さ) (継続)

「N+ずくめ」の用例はBCCWJで162件見つかる(「キー:[語彙素=尽くめ][品詞=接尾辞]+前方共起:[品詞=名詞]」)。前接要素は「黒」(70件)、「こと」(43件)が多いが、注目したいのは「仕事」(1件)である。

他の接尾辞を見ると、「どおし」は通常、名詞接続は認めにくい¹⁵。一方「づめ」は動詞接続ほど生産的ではないが、名詞接続が可能である。これらに先ほどの「ずくめ」と同様に名詞接続が主である「づくし」「づけ」を含め、Japanese Web 2011 corpus (jaTenTen11) 内で「仕事」との共起を検索した結果が表6である。

表6 前接要素「仕事」の用例数

仕事どおし	2 件
仕事づめ	90 件
仕事ずくめ	70 件
仕事づくし	38 件
仕事づけ	608 件

興味深いことに、通常、名詞接続が認めにくい「どおし」にも、以下のような「仕事どおし」の用例がわずかに2件見つかる。

(13) a. 画像は本日の弁当～今日は仕事**通**しで、今休憩です(ω┐A)

b. あーいかわらず寝ずの仕事**通**しで。

(Japanese Web 2011 corpus (jaTenTen11))

前接要素「仕事」と「働く」は品詞としては異なるものの、意味的に近く、一方の使用が一方を連想させることで用法が広がったことを窺わせる。則ち、「どおし」「づめ」は、用例数の多い「働きどおし/づめ」から「仕事どおし/づめ」が可能になり、逆に「ずくめ」「づくし」「づけ」は用例数の多い「仕事ずくめ/づくし/づけ」から「働きずくめ/づくし/づけ」が可能になっていったと考えられる。

さらに、このような「仕事」と「働く」の類似性に基づく動機付けだけでなく、他の接尾辞に基づく動機付けも働く。例えば(14)のように「仕事づめ」と「仕事ずくめ」が結びつくことで「づめ」と「ずくめ」が比較され、定着度の高い「働きづめ」から「働きずくめ」の使用が可能になると考えられる。

(14) 仕事づめ：仕事ずくめ＝働きづめ：[X]ずくめ

[X＝働き]

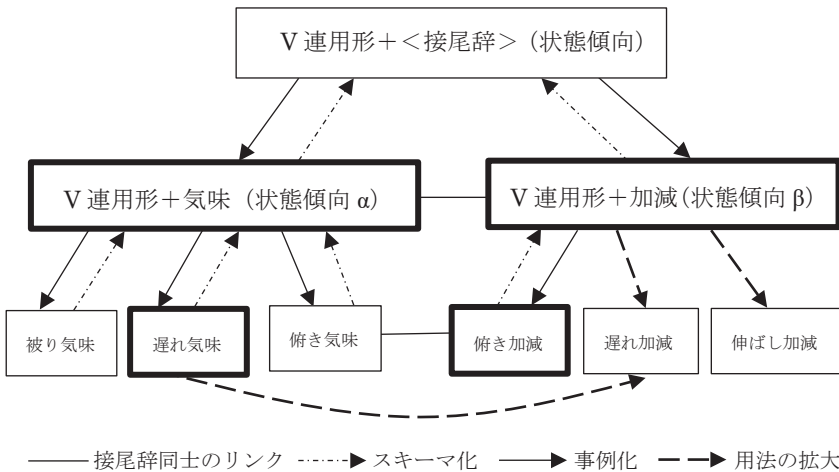
ここでは、前接要素の拡大と同時に、「ずくめ」の意味拡張（「モノ・コトの多さ」から「継続」）にも他の接尾辞が関わっていることになる。同じ過程は「づくし」「づけ」にも当てはまるものと考えられる。

5-2. 「気味」「め」「加減」と用法の広がり

3-2節で述べたように、「め」「加減」は「控えめ」「俯き加減」などの語彙的な定着度が高い一方で、低い頻度で「気味」と同様の前接動詞が広く用いられている。本節では「め」「加減」の用法が広がる過程を考える（図4）。

「加減」の場合を例にすると、「加減」は「俯き加減」での定着度が非常に高い。「俯き加減」を中心とする使用から「V連用形+加減」が抽出される。一方で、多くの事例から抽出され、定着度が高い「V連用形+気味」が存在する。「V連用形+加減」自体の定着度はそれほど高いわけではないが、両者の間に共通するスキーマ「V連用形+＜接尾辞＞（状態傾向）」を基盤としてリンクができる。

図4 「加減」の使用拡大



このようなスキーマレベルのリンクは、事例レベルにおいて定着度の高い「俯き加減」に対して同じ前接要素を持つ「俯き気味」が存在し、両者にリンクができることにも支えられる。

定着度の高い「V連用形+気味」と結びつくことで、「V連用形+加減」が一時的に活性化する（図4内ではあらかじめ太枠で示している¹⁶⁾）。これにより「V連用形+加減」というスキーマを基に用法が拡大する。5-1節とは異なり、ス

キーマに基づく用法拡大のモデルは、「疲れる」「遅れる」のような「気味」において高い頻度で現れる前接動詞だけでなく、「伸ばす」のような「気味」においてそれほど頻度が高くない前接動詞も、「加減」において出現する（「伸ばし加減」）ことを説明可能にする。ただし、ここでの「V 連用形」はどのようなものでも可能であるわけではなく、「気味」に前接し得る動詞に限られる。「V 連用形＋気味」の用例における「気味」が「加減」に置き換わる形で用法が拡大するのである。

5-3. 「類推」と「スキーマ」の同時的活性化

5-1 節では類推、5-2 節ではスキーマに基づく用法の拡大について論じてきたが、本稿は 4 節での Tuggy (2007) や Booij (2010) に基づき、類推とスキーマのどちらか一方が必ずしも、排除されるわけではないという立場を取っている。

5-2 節の図 4 において、「遅れ気味」から「遅れ加減」間の矢印で示しているが、先に述べた「俯き加減」と「俯き気味」との事例レベルのリンクに基づき、「遅れる」のような「気味」において使用頻度の高い前接要素が「加減」にも現れるという経路も想定することができる。幅広い用法の広がりの説明するのにスキーマを用いることは合理的ではあるが、事例レベルの類推的な用法拡大の経路自体が否定されるわけではない。

また、5-1 節で扱った接尾辞も、3-1 節で述べたように完全に「働く」「立つ」「歩く」だけが前接要素として現れているわけではない。特に「づめ」においては Japanese Web 2011 corpus (jaTenTen11) で「[tag=V.g & infl_form=Cont.g] + [lemma= 詰め]」という条件で検索すると、「め」「加減」ほどではないものの、頻度が低いながらも比較的幅広い前接要素を接続させることがわかる。表 7 に「どおし」における同じ前接動詞の件数を併記したものを提示する。

表7 「づめ」に前接する動詞連用形の分布

	づめ	どおし		づめ	どおし
働く	1658	208	食べる	2	32
歩く	201	275	走る	2	56
立つ	68	132	描く	2	5
動く	15	25	言う	1	3
通う	9	2	向かう	1	3
歌う	6	34	走り回る	1	1
話す	4	14	弾く	1	7
叩く	3	2	入る	1	1
出る	3	2	鳴く	1	63
喋る	2	147	冷やす	1	0
泣く	2	332	唸る	1	0
書く	2	3			

*列は「づめ」の前接動詞の降順

上の分布は、「気味」「め」「加減」を扱った表5にやや近づいている。この場合、類推を中心としつつも、「V連用形+どおし」とリンクした「V連用形+づめ」というスキーマも働いていると想定することで、むしろ、より「づめ」の分布に沿った用法拡大の説明をすることができる。

6. おわりに

本稿では類推・スキーマの理論に基づきながら、異なる接尾辞同士が繋がりを持つことで、用法が広がる過程を考察してきた¹⁷。

新たな接尾辞を巻き込んだ用例が増えることで、「V連用形+＜接尾辞＞（継続）」、「V連用形+＜接尾辞＞（状態傾向）」という、より抽象的なレベルのスキーマが定着度を増していくことになる。

また、本研究で取り上げなかった接尾辞も含め、このような用法の拡大と接尾辞間の新たなネットワークの形成が、「句接辞」というカテゴリーそのものをより強固に定着させていくこととなると考えられる。

注

- 1 本稿での「モデル」とは用法拡大の模範を意味している。
- 2 「放題」「すぎ」「がち」「気味」「め」「そう」「げ」は動詞連用形以外の前接要素も可能だが、基本的に動詞連用形接続の用法だけに注目する。
- 3 平野（2021, 2022）では「動作・出来事の継続」「結果状態の継続」のように意味を二分しているが、本稿の議論には関与しないため「継続」とまとめている。
- 4 青木（2016）は、現代語の句接辞を接尾辞からの通時的な変化の結果であると推察している。本稿でも同様の立場を取り、「づくし」「づけ」を接尾辞から句接辞への変化の過程にあるものとして扱うが、その詳細は別稿で論じたい。
- 5 格標示については「迷惑のかけどおし」や「心配のしどおし」なども含めている。
- 6 「生き通し」は宗教に関する用語であるようである。以降の表などからは除いている。
 (i) 金光教の教祖様は、「人間は生き通しが大切である。生き通しとは死んでから後、人が拝んでくれるようになることである」と、み教えくださっています。
 <<http://webkonkokyo.info/data/n1334725542>>（最終検索日 2022 年 10 月 25 日）
- 7 検索に際しては、誤解析や明らかに不適当な用例を除くほか、主に以下のような調整を行なっている。これらは以降の検索結果においても同様に行なっている。
 (i) 一語として登録されたものが混在している場合も検索し、結果に反映している（「立ちどおし」「働きづめ」「歩きづめ」など）。
 (ii) 前接の語彙素が連用形で登録されているものが混在している場合も検索し、合算している（「[lemma = 働き] + [lemma = 尽くめ]」における「働き」など）。
 (iii) 複合動詞の連用形と思われる用例は排除している（「読み尽くす」の連用形「読み尽くし」として用いられている用例など）。
 (iv) 「どおし」は、実際は複合動詞「V 連用形 + とおす」と区別なく登録されていることが多く、「[lemma = 働く] + [lemma = 通す]」のような条件での検索も行い、抽出されたものから接尾辞と思われるものを抜き出して合算している。
- 8 「踊りづめ」「戦いづくめ」「遊びづけ」などの前接部が名詞か動詞か判然としないものの、「使い詰め」（競馬用語）、「出尽くし」（証券用語）などの専門用語、「食べ尽くし」のような複合動詞「食べつくす」からの転成だと考えられるもの（つまり「食べることを継続する」の意ではなく、「あるものを全部食べる」の意を表しているもの）は除いている。
- 9 「迷惑を掛ける」「苛々する」といった、「どおし」において頻出の前接動詞が他の接尾辞に現れないことは、注 4 と同様に、接尾辞から句接辞へと変化していくという立場を取り、「どおし」以外の接尾辞が十分に「句接辞」として定着していないと考えれば、妥当な説明を与えられる。つまり、影山（1993）に従えば、通常の接尾辞は統語的な要素を介入させないが、ここでの「苛々する（動名詞）」、「迷惑を掛ける」などは

統語的な要素と考えられるため、「づめ」以下の接尾辞には現れにくいと説明できる。

- 10 趙 (2016) では「切れ気味」「酔い気味」「焦り気味」を名詞接続の例としているが、本稿では動詞連用形接続の例として考える。また「サボり気味」の前接要素も「サボる (動詞)」(4件)、「サボり (名詞)」(8件)として分類されているが、本稿ではこれらを合計した12件を動詞連用形接続として考え、それぞれ表4に反映している。
- 11 Tuggy (2007 : 114 注) は -jet などの新語形成の経路を描く上で、「仮に歴史的な順序が実際に違ったとしても、上の経路は、初めてこれらの表現を聞いた者の経験を表すことができている」と述べている。本研究も通時的過程を保証するものではないが、現代語話者が心内に持つ文法を表していると考えている。
- 12 本研究での構文の定義は、Goldberg (2013) の次の記述に従うものとする。

(i) Constructions are defined to be conventional, learned form-function pairings at varying levels of complexity and abstraction

(Goldberg 2013 : 13)

- 13 同時に本稿では、3節において収集したような実際の用例から一般化 (スキーマ化) がなされていくというボトムアップ的 (bottom-up) なアプローチを重視する動的用法基盤モデル (Dynamic Usage-based Model) (Langacker 2000) に従う。
- 14 本稿では詳しく立ち入らないが、本稿において共通する接尾辞 (句接辞) の品詞性については平野 (2021) に従い、第三形容詞性 (村木 2012) であると考ええる。
- 15 「夜通し」のような、名詞「夜」を接続させ、副詞として用いられる場合はある。
- 16 厳密には図4における「V連用形+加減」は一時的な活性状態にあり、定着しているわけではないが、便宜上、同じ太枠で示す。定着と活性化の関係については別稿で論じたい。
- 17 本稿で扱ってきた接尾辞は類義的である。Cruse (2011 : 142-143) は、全ての文脈において交換可能な *absolute synonyms* はほぼ存在しないと述べており、それと区別して、意味のニュアンスに違いがあることを強調した *near synonyms* という用語を設けている。本稿でも図1をはじめ、各図の中で示してきたように、具体的なレベルにおいて、それぞれの接尾辞の意味は正確には異なる。抽象的には同じ意味だという理由で異なる接尾辞同士が繋がるが、その一方で具体的なレベルでの意味の違いが、新たな接尾辞を用いようという動機につながっているのではないかと思われる。

参考文献

- 青木博史 (2016) 『日本語歴史統語論序説』 ひつじ書房
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 趙海城 (2016) 「傾向を表す接尾辞「～がち」「～がみ」について」『明星国際コミュニケーション研究』 第 8 号 pp.31-49
- 新山聖也 (2020) 「統語的に形成される述語名詞について」『日本言語学会第 160 回大会予稿集』 pp.244-250
- 平野啓太 (2021) 「動詞連用形に接続する接尾辞における句の包摂と品詞性・意味の関係について」『間谷論集』 第 15 号 pp.67-88
- 平野啓太 (2022) 「スケールを持つプロファイル決定子としての句接辞―「書きたて」「開けっぱなし」「休みがち」などを対象に―」『日本認知言語学会論文集』 第 22 巻 pp.257-269
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』 ひつじ書房
- Barðdal, Jóhanna and Spike Gildea (2015) "Diachronic Construction Grammar: Epistemological Context, Basic Assumption and Historical Implications," Jóhanna Barðdal, Elena Smirnova, Lotte Sommer and Spike Gildea eds., *Diachronic Construction Grammar*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins, pp.1-49
- Booij, Geert (2010) *Construction Morphology*, Oxford: Oxford University Press
- Bybee, Joan L. (2015) *Language Change*, Cambridge: Cambridge University Press (小川芳樹・柴崎礼士郎監訳 (2019) 『言語はどのように変化するのか』 開拓社)
- Cruse, D. A. (2011) *Meaning in Language (3rd ed.)*, Oxford: Oxford University Press
- Goldberg, Adele. E. (2013) "Constructionist Approaches," Thomas Hoffmann and Graeme Trousdale eds., *The Oxford handbook of construction grammar*. Oxford: Oxford University Press, pp.15-31
- Kay, P. (2013) "The Limits of (Construction) Grammar," Thomas Hoffmann and Graeme Trousdale eds., *The Oxford handbook of construction grammar*. Oxford: Oxford University Press, pp.32-48
- Langacker, Ronald W. (2000) "A dynamic usage-based model," Michael Barlow and Suzanne Kemmer eds., *Usage-based models of language*. Stanford: CSLI Publications, pp.1-63 (坪井栄治郎訳 (2000) 「動的使用依拠モデル」 坂原茂編『認知言語学の発展』 ひつじ書房 pp.61-143)
- Tuggy, David (2007) "Schemacity," Dirk Geeraerts and Hubert Cuyckens eds., *The Oxford handbook of cognitive linguistics*. Oxford: Oxford University Press, pp.82-116

【使用コーパス】

『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』(検索ツール「中納言」)

『Japanese Web 2011 corpus (jaTenTen11)』(検索ツール「Sketch Engine」)

ヒラノ ケイタ (大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程)

Expansion on the Usage of Phrasal Affixes

HIRANO Keita

Generally, suffixes attach to word level and generate derivative, but there are also suffixes attach to phrasal level. This is called "phrasal affixes", which is one of the kind of suffixes.

Current researches are focusing on high productive phrasal affixes only. However, there are also less productive phrasal affixes. In this thesis, less productive phrasal affixes had been analyzed. Additionally, the thesis had looked into the expansion on the usages of phrasal affixes which had never been applied.

These phrasal affixes included those showing "durative" with high productivity "-dooshi" and with low productivity "-zume", "-zukume", "-zukushi", "-zuke", and those showing "stative tendency" with high productivity "-gimi" and with low productivity "-me", "-kagen".

The followings were found when searching the examples of the usage in corpus. Regarding phrasal affixes showing "durative", preceding verbs for "-dooshi" with high productivity, "hataraku", "aruku", "tatsu", were frequently seen. They were playing the main roles for preceding verbs for "-zume", "-zukume", "-zukushi", "-zuke". For phrasal affixes showing "stative tendency", preceding verbs for "-gimi" with high productivity were also broadly used by "-me", "-kagen", but were not frequently found.

In this thesis, creation of new expression was based on both analogy and schema. It further stated that, especially according to the practical usages in the corpus, it is reasonable to expand the usage of low productive phrasal affixes, on the basis of high

productive phrasal affixes.

Based on the usage on instance level of "-dooshi" ("hatarakidooshi" and "arukidooshi" etc.), the usage of "-zume", "-zukume", "-zukushi", "-zuke" had been expanded analogically. On the other hand, based on the schema of "-gimi" (v-continuative form + gimi), the usage of "-me", "-kagen" had been expanded.

It was considered that, the expansion of the usage through the conjunction among different suffixes, had further strengthened the wide category of "phrasal affixes".